

〔東雅地輿〕井^ヰ 萬葉集抄に、井とはあつまるといふ詞也といふ、地を鑿て水を集さしむるの義なるべし、日本紀に、好井の字、讀てシミヅといふ、シミとはスミ也、シトイヒ、スといふは轉音也、ツとはこれも萬葉集に、井をツといふ、ツとは水也といひし是也、井水は清ぬるを好とする事なれば、好井の字を借用ひられしなり、後に清水の字、讀てシミヅといふも、亦此義と見えたり、

〔倭訓栞前編四十三〕ゐ・井をよむは集^{ヰル}の義、水のあつまるをいふと、萬葉集抄に見えたり、歌に、板井、石井、筒井、田井、山の井など、よめり、字書に伯益造之、因井爲市也と見ゆ、○中 壇をよむも井の義に同じ、せぎをして水を集る也、

〔守貞漫稿家宅〕井 今世ノ俗ハ、諸國トモニ井戸ト云、

〔延喜式祝詞〕新年祭○中

座摩乃御巫乃稱辭竟奉皇神等能前爾白久生井榮井津長井、阿須波婆比支^登御名者白氏、辭竟奉者○下

〔八雲御抄地儀〕井 山井 山あ井をもいふ 石井 いは井 いたゐ さて井 はしり 玉
ゐ三井寺 あか

〔藻鹽草五水邊〕井

山井^ヰ山のゐとの、字ありても、又山井は淺き事に云り、さればあさくは人^ヰ石井 岩井 いた井
はしり井 あか井^ヰ云、されどもこのましからず、御井 井づ、つく井 つ、井づ、といは
ぬづのぬづ、ぬづ、といへる也、つ、々、ふる井古たな井^ヰ水などいな井 ふか井 玉井 のり
の井 寺井 とを井 とこ井 かげのいは井 玄ばのかげ井 板井の清水 井もと^ゐの本
ましやあづがぬもとの、岩つぼにた、ふばかりの山の井 さくら井 庭井の水 岩にせくあ
か井の水 いさら井小也、